

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00641

研究課題名（和文）言語構造における「標示」のインターフェイス研究

研究課題名（英文）Research on labeling and legibility at the interfaces

研究代表者

中村 太一（Nakamura, Taichi）

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：00613275

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、統語構造が「標示」を用いてどのように解釈されるのかについて、英語と日本語のデータに基づき考察を行った。近年の極小主義理論では、標示は、意味と音のインターフェイスが統語部門で構築された構造を解釈するためにのみ必要であり、構造構築とは独立の標示付けアルゴリズムにより与えられると考えられている。この仮説の妥当性を検証するために、一見したところ異なる構造を持ち、異なる標示を持っているように見える統語対象が一定の意味的特徴を共有する例外的な言語現象を取り上げ、同一の標示を与えられる構造に省略が適用されることにより得られることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

標示付けアルゴリズムが、例外的現象を含む広範な現象を説明できるという点で、経験的に妥当であることを示した。標示を用いて統語構造がどのように解釈を受けるのかに関して、同一の標示を等位項間に要求する等位構造や削除に課せられる同一性の観点から考察することを通して、標示の解釈への関与は一樣ではなく、等位構造よりも削除のほうがより厳密な同一性に従うことが示唆された。また、標示の観点から削除下における項交替現象の考察を行い、動詞研究における反語彙主義の立場を支持した。このように、インターフェイス研究や統語論研究の発展にも寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：In this research, I have examined how syntactic structures receive interpretations at the syntax-semantics and syntax-phonology interfaces under the assumption that syntactic objects must be labeled for interpretation and the label is determined by the labeling algorithm (Chomsky (2013, 2015)). I have investigated the cases in which two syntactic objects that appear to be labeled differently are nonetheless interpreted similarly, I have shown that they are also explained by the labeling theory if we assume that deletion is involved in those cases.

研究分野：英語学

キーワード：構造構築 標示 インターフェイス 省略

1. 研究開始当初の背景

構造および構造構築は言語の本質を考える上で重要な概念である。生成文法理論の変遷においては、構造構築はその簡素化を通して、理論の深化の過程で大変重要な役割を担ってきた。近年では、構造構築の簡素化はさらに推し進められ、構造構築の過程で与えられるとされてきた「標示」が構造構築自体から完全に分離されるに至った。この簡素化を支える重要な考え方は、標示は構造構築にとって何ら役割を果たさず、言語機能とインターフェイスを形成する感覚運動と概念・意図システム(以下外部システム)が構築された構造を解釈するためにのみ必要であるとするものである。このため、標示は構造構築の結果に独立の標示決定の仕組みが適用され得ることとなる。

この考え方の下では、標示決定の仕組みにより標示が決定されない構造の存在が予測されるが、そのような構造が外部システムによりどのように扱われるのかについての詳細な検討がほとんどなされていない。これと関連して、2つの統語対象が同一の意味タイプに分類され、共通の意味的特徴を持つのは、これらの統語対象が同種の構造を持ち、同一の標示が与えられるためであると考えられるが、少なくとも表面的にはそのようには見えない例外的現象も散見される。この場合、その背後に同種の構造が抽象的なレベルで存在し、それゆえ同一の標示が与えられている可能性も考えられるが、外部システムが、標示を介さずに、異なる構造を持つ統語対象を同一の意味タイプに分類し、共通の意味特徴を持つものとして解釈している可能性も考えられる。

2. 研究の目的

上述の点を踏まえ、本研究課題では、標示決定の仕組みが外部システムにとって適切な標示を与えることが可能かどうか、そして外部システムが標示によらずに独自の仕組みにより解釈することが可能な構造が存在するかどうかを検証し、構造構築から標示決定を完全に分離可能かどうかを明らかにすることを目的とする。そのために、(i) 構造構築、(ii) 標示決定の仕組み、そして (iii) 外部システムの間での相互作用の観点から、少なくとも表面的には同種の構造を持っているようには見えないが同一の、または共通する意味的特徴を持つと考えられる例外的現象(等位構造と削除現象)について考察を行った。

3. 研究の方法

上述の例外的現象として、まず英語および日本語の等位構造が関与する現象を調査対象とし、文献調査、コーパス調査、インフォーマントの内省判断の調査によりデータを収集した。等位構造はその等位項に同一の範疇や文法機能を持つ要素を要求する。本研究課題では、同一の範疇を同一の標示と同等のものとし、等位項に課せられる同一性の要求に何らかの形で違反しているように見える現象を調査し、その内部構造についての提案を行った。また、意味・統語・音の同一性が課せられると考えられている削除現象も取り上げ、削除部と先行詞の間には標示の同一性も課せられるものと考え、その派生について提案を行った。データに関しては、等位構造のデータと同じ方法で収集を行った。

等位構造と削除が関与する現象にみられる同一性を標示の観点から捉えるのが正しいのだとすると、それら2つの同一性はどちらか一方を他方に還元可能か、それとも異なる条件として述べる必要があるか等新たな問いが生じる。本研究課題では、上記の調査・研究結果に基づき、これらの問いについても考察を行った。

4. 研究成果

本研究課題では、標示決定の仕組みが外部システムにとって適切な標示を与えることが可能かどうかを批判的に検討し、その妥当性について考察を行ってきた。以下、本研究課題の成果について概説する。

まず、等位項に課せられる同一性の要求に違反し、等位項が異なる標示を与えられているように見える現象が英語には観察される(“John eats only pork and only at home.”)。このような例の意味解釈に関して、先行研究の事実観察や独自にインフォーマントから得た内省判断等に基づき、等位項がそれぞれ動詞の表す出来事に独立に関与する、複数の出来事の読みが得られることを明らかとした。また、独自にインフォーマントから得た内省判断から、等位項に先行する動詞のタイプによって、等位項の語順を自由に交替できる場合と、そうでない場合があることを明らかとした。そのうえで、これらの事実を説明する分析として、当該現象は基底構造として表層における等位項をその内部に含む動詞句が等位接続されており、その構造に表層の等位項を残余句とする形で動詞句削除が適用されることにより派生される分析を提案した。この分析の帰結として、等位構造の等位項に課せられる標示の同一性の条件の存在が支持されること、そして標示

決定の仕組みが、当該現象にも例外なく適用されているという意味で、経験的に妥当であることが示された。当該研究は北海道教育大学の楳本顕士氏との共同研究の形で行ったもので、その成果の一部は日本英文学会中部支部第 71 回大会で研究発表、そして *Explorations in English Linguistics* 37 において論文の形で発表を行った。

同じく、等位構造が関与する現象として、英語と日本語における文頭の wh 句の等位接続にみられる例外的特徴の説明も試みた(“What and when did you eat?”や「誰がそして何をビールに飲ませたの。」)。先行研究の事実観察や独自にインフォーマントから得た内省判断等に基づき、この種の等位構造に観察される例外的特徴を明らかとした。まず、一見したところ、第一等位項は句として不完全であり、またその派生において通常の wh 疑問文の派生では許されない、左枝条件 (left branch condition) に違反する形で wh 移動が適用される場合がみられる(“Just what and when [extra security precautions] will be required by an insurer can vary.”や「どんな、そして何色のドレスをユキは買ったの。」)。また、異なる文法機能を持つ wh 句が等位接続されており、上述の等位構造にみられる標示の同一性にも違反をしているように見える。これらの一見したところの例外的特徴が観察される条件として、独自にインフォーマントから得た内省判断等に基づき、第一等位項の直後に第二等位項に後続する部分を復元することで、文法的な wh 疑問節が形成可能でなければならないことを特定した。その上で、当該現象が、wh 節を等位項とする基底構造に、音声形式上の同一性に基づく音声列削除が適用され派生されると提案した。この分析の帰結として、wh 節が等位接続される構造を基底構造としている点で等位構造に課せられる標示の同一性の条件の存在が支持され、既存の標示決定の仕組みが経験的に妥当であることが示された。さらに、音声列削除の適用により不完全な句や左枝条件に違反する wh 移動の存在を認めずにすむという点で、既存の構造構築の仕組みや左枝条件の存在を支持し、理論内の整合性を高めることにも寄与した。当該研究は、同志社大学の瀧田健介氏と九州大学の前田雅子氏との共同研究であり、その成果の一部を国際学会 *Japanese/Korean Linguistics* 28 で発表した。

さらに、日本語における空所化を取り上げ、動詞の自他交替や場所格交替のメカニズムについて考察を行った(「タケシが雑誌を、そしてカオリが本を買った。」)。日本語の自他交替をする和語動詞の中で、自動詞形と他動詞形で異なる接辞が現れる場合両者の間でどちらを先行詞にしても空所化が不可能であるが、自動詞形と他動詞形が同じ形である動詞は両者の間でどちらを先行詞にしても空所化が可能であること、また動詞の形を変えずに交替する場所格交替でも両者の間でどちらを先行詞にしても空所化が可能であることを、インフォーマントから得た内省判断から明らかとした。これらの事実は、日本語の自動詞と他動詞を区別する役割を接辞の投射が担っていると仮定すると、自動詞形と他動詞形で異なる接辞が現れる場合には、接辞の種類の違い、またはその音声的具現形の違いにより、削除に課せられる同一性違反が生じているものと考えられ、削除に課せられる同一性に標示が関与している可能性が示唆された。この分析によれば、自動詞形と他動詞形が同じ形である場合には、同一の接辞が用いられており、標示の同一性に違反せず、両者の間でどちらを先行詞にしても削除が可能となる。また、場所格交替のような動詞の交替形間で削除が可能であることから、動詞の項交替を語彙部門ではなく、統語上で捉えることを試みる反語彙主義の立場が支持されることが示された。さらに、等位構造の等位項に課せられる標示の同一性よりも、削除に課せられる標示の同一性のほうが、より厳しい条件であることが示唆された。この成果の一部は「ことばの様相 現在と未来をつなぐ (開拓社、2022 年)」に収録されている。

本研究課題では、「標示」の同一性が等位項間で求められる等位構造と削除部と先行詞の間で求められる削除が関わる現象に焦点を当て、(i) 構造構築、(ii) 標示決定の仕組み、そして (iii) 外部システムの間での相互作用の観点から考察を行ったが、標示決定の仕組みが今回取り上げたような例外的現象においても外部システムにとって適切な標示を与えることができることが明らかとなった。この結果は、外部システムが標示によらずに独自の仕組みにより解釈することが可能な構造が存在するかどうかの検証にはつながらなかったものの、構造構築とは独立に存在するとされる標示決定の仕組みは経験的に妥当であり、一定の成功を収めていることを示したと言える。また、等位構造と削除に課せられる同一性条件それぞれにおける標示の役割や重要性についても明らかとすることができ、外部システムとのインターフェイス条件の解明にも寄与した。さらに、動詞の項交替については反語彙主義の立場を支持する論拠を提示するなど、統語論研究の理論的・経験的発展にも貢献したと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Taichi Nakamura, Kenji Sugimoto	4. 巻 37
2. 論文標題 On the Coordination of Unlikes	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Explorations in English Linguistics	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masako Maeda, Taichi Nakamura and Kensuke Takita	4. 巻 28
2. 論文標題 Left Branch Extraction in Coordinated Wh-Questions in Japanese and English	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 49-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村太一	4. 巻 -
2. 論文標題 日本語の空所化と項構造	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ことばの様相－現在と未来をつなぐ－	6. 最初と最後の頁 358-368
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶本顕士・中村太一	4. 巻 -
2. 論文標題 動詞句内要素の等位接続について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本英文学会2019年度中部支部第71回大会プロシーディングス	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Masako maeda, Taichi Nakamura, and Kensuke Takita
2. 発表標題 Left Branch Extraction in Coordinated Wh-Questions in Japanese and English
3. 学会等名 The 28th Japanese/Korean Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梶本顕士・中村太一
2. 発表標題 動詞句内要素の等位接続について
3. 学会等名 日本英文学会中部支部第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 瀧田健介・中村太一・前田雅子
2. 発表標題 等位接続された残余句を含むスルーシングと島の修復
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村太一
2. 発表標題 内項およびそれに準じる表現の認可条件についての一考察
3. 学会等名 日本英文学会北海道支部第64回大会シンポジウム
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------